

年賀の薦樽

こもだる

旧家の正月を飾ってきた薦樽。生活習慣の変化で最近目にする機会はすっかり減ってしまったが、入念な手作業で造りあげる職人の心意気は、今もなお変わらぬ。

前か後か

まずは年頭初笑い。むかし一世を風靡した『冠婚葬祭入門』的な質問をしよう。

元日のお神酒は、届いた年賀状を讀む前に飲むのか、読み終えてから飲むのか。それとも、読みながら飲むのか……。

正解は、ハテ。

除夜の鐘が響き、年越し蕎麦を食べながら飲むその延長で、明け方まで飲み続ける人もいることだろうが、それは論外。律儀な人間関係を遵守する人たちのあいだでは、今も「お年賀」と称して実家のある郷里に集う。一方では、地縁より社縁にすがって上司宅訪問を先陣争いする慣

例もある。

神事に做うなら、お神酒ふるまいは賀詞交換を終えてから。だから、読み終えてから盃をとるのが正解なのだ。ただし、年賀状は、年始参りの口上を端書に認め、人手を介して届ける横着な便法として瞬く間にひろまったのだから、読みながら飲む無作法も非難には値しない。口上の巧拙や子煩悩ぶりを香に飲む酒の味はひとしおだ。

日本の正月儀礼に欠かせないお神酒。元旦にだけは、年端もいらない子どもたちにもお神酒が一献ふるまわれた（わたしが幼稚園児だったころの我が家ではそうだった）。

元日また三が日にいただくお神酒は、本来は屠蘇酒といって、百虎、

桔梗、肉桂、山椒などの生薬を調合

した屠蘇散を入れた袋を、日本酒や味醂に浸した薬用酒だった。来る一年間の邪気を払い、延命にも効力ありと信じられていた。だから「屠蘇延命散」とも称されてきたのだが、平均寿命が長くなりすぎた現代人の味覚には、なじまなくなつたらしく、屠蘇酒はすたれつつある。それでも、歳末に屠蘇散を仕入れておく酒店はある。スーパーマーケットでも買えなくはない。

えつ、蕪蓄はもういい？ それより薦樽はいつ出でくるのかだつて？

さすが、左党だねエ。薦樽の鏡開きとは威勢がいい。杵は揃えたかい、小槌はどうだい？ 杵と塩の用意もい

ないか。「家業統」の証し
年始参りにそなえて薦樽を用意する本家ともなれば、分家の数も半端ではないだろう。婚出子とその子どもたちも、皆、それぞれに着飾って訪ねてくるのだから、お年玉袋の数もさぞかしかさむことだろう。でも、それこそが、柳田國男が理想とした「家業統」の証しだったはずのことなのだ。薦樽の容量は四斗（約七十二リットル）。一升瓶四〇本に相当する。この途方もない大量のお神酒を一夜で飲み明かすほどの、空樽にしてなおあり余るエネルギーが、往年の旧家にはあった。台所まわりの構



刷りあげた印薦をていねいに縫いとじてゆく(辰馬本家酒造にて)

造変化とレトルト食品の氾濫で、すっかり生活習慣が変わってしまったものだから、今日、民俗調査で年の瀬・年頭近い農山村を訪れてみても、土間の上框近くに「幸木」を飾っているところはほとんど見かけなくなつた。切身の塩鮭を冷蔵庫に入れてあるので、新巻鮭の一本も見かけることがない。特に、都市とその近郊住宅地では……。

そのようなところに建つ3LDKの上司宅で、薦被りの四斗樽からのお流れに与するうたつて、それは、所詮、無理な話だ。部長が桐箱入りの一升瓶をおもむるに取り出してきたら、それだけで今年は安泰だと悟るべきである。注がれても、自重して三杯目のお流れをいただくことは戒めるべし。奨められても留まるが吉。

入念な手作業で

ところで、よくありがちなのがミニ薦樽入りの地酒。観光みやげだから造作は粗い。印薦の素材も安価なイミテーションである。本当の薦樽は、今も入念な手作業で、天然の素材を活かしながら数々の行程を経て生産されている。わたしが酒造用具調査に参加した当時、伏見や灘の大手酒造会社が発注していた商標銘柄入りの印薦は、梗米の藁を編んだ粗

薦を材料にしていた。これに布海苔を塗布して白砂（灘地方では甲山から採取した山砂といっていた）を擦り込んでなじませながら、手数をかけて表面を磨き、塗料のりやすくなるように平滑化していく。そのように手間をかけて仕上げた表面に、柿渋を塗って補強した型紙を当てて色づけをするのだった。
このとき使用する型紙は、典具帖紙といふのか、藍染に使う型紙と似た孔版印刷用の硬い型紙である。刷りあげた印薦は、天日乾燥させてから樽に巻いて縫い綴じる。そして、最後に縄をかけて薦樽が仕上がるのである。
印薦造りは、民芸品まがいのミニ樽と大手酒造会社の量産品以外は手作業だから、職人一人が一日に仕上げる枚数は、熟練した人でも十枚枚だと、伏見では聞いた。そして、印薦職人たちの多くは、酒造をはじめとする醸造業が盛んな都市近郊農民たちだった。秋の収穫を終えてからの副業だったという。
最後に、印薦職人たちからのホンをひとこと。
心をこめて、苦勞して造りあげた印薦。なかでもとびきり上出来と思える十枚枚は、神様への奉納酒樽用にとっておく。
「もつたないから、人間には渡さない。」